

古川柳研究会会報

一四六号

平成二十年五月

川柳評万句合明和四年論議

平成二十年三月十五日

礎講 小栗清吾

明四松1続き

9 × こし元によばせてちんをほへやませ

(腰元に呼ばせて狎を吠えやませ)

狎が吠え続けてどうしようもないので、ふだん狎の世話をしている腰元に名前を呼ばせ吠え止ませる。武家屋敷などの光景だろう。

なぶられた腰元ちんをけしかける 三〇18

10 × かま元_トに羽二重着_るはんじもの

(竈元に羽二重着たる判じ物)

11 ○ 千両は壹分かけても氣にかゝり 五7

(千両は壹分欠けても氣に掛かり)

千両は「千両箱」などの用語もあるように、「千両」という単位であつてこそ貴重なもの。千両全体から見れば一分は端金であるが、それが欠ければ「千両」にはならないわけだから、氣に掛かるのである。

千両のつゝみハ壹歩よりくづす 見利寛五125

12 御夜つめに御次へ座頭おして来_ル 五8

(御夜詰めに御次ぎへ座頭押して来る)

夜詰めⅡ夜、君側、または役所などに出勤していること。夜番。(日)

押すⅡ押しかけていく。押しかける。(江)

座頭の居催促の句。座頭が、旗本などに貸した金が滞っているので、屋敷へ押しかけ次の間に夜を徹して座り込んで催促する様子。

かなる程かなつて座頭よこになり 安二桜3

13 ○ 御めかけのいふ程のことぜとなされ 五8

(御妾の言う程のことはとなされ)

是Ⅱ正しいこと。

お妾に甘いお殿様。お妾の言うことは何でも「そうだ、

竈元Ⅱ①かまどのある所。台所。②おしろいの製造元。

③窯のあるところ。(日)

「判じ物」は「ある意味をそれとなく文字や絵などにして表わし、人に判じ当てさせるようにしたもの」(日)と辞書にあるが、ここでは、

上下で三日帰らぬはんじもの 六23

あのよふな顔でも持参はんじ物 宝一二仁2

のように、「それは一体どういうわけだ？」という表現であろう。

主題句は、台所の竈の前に羽二重を着た人がいるのだが、これ一体どういうことかわかるかな?という意と思われるが、判然としない。

席上では、太鼓持ち、竈祓い、勘当息子、朝帰りなどの説が出されたが、結論出ず。

そうだ、それでよい。そうしろ」などとおっしゃる。

「是となされ」という堅い言葉で武家を暗示。

おめかけのきんげんばかり御もちる 三一7

14 ▲ うろこ形_ヲ羽織_ニ着_テもむつかしい

(鱗形羽織に着ても難しい)

鱗形Ⅱ三角形を一つまたは三つ以上を頂点をあうように組み合わせて配列したもの。(日)

ここで「鱗形」模様の「羽織」とは、『譬喩尽』に「菖蒲草として鱗形の模様染付しをいへりこれを正平染ともいひて究めて武家の足軽これを着す(略)」とあるように、足軽着用の羽織のことであろう。

主題句は、たとえば門番の足軽が何かにつけて「たごた文句を付けるような場面を想定して「難しい」(煩わしい。うるさい。面倒だ)」と評した句と思われる。また、「鱗形」で連想されるのは蛇体となった「清姫」であるから、「そつちも難しいが羽織に着た方も」と言ったところが技巧。

見付からわさびおろしが出て呵_ッ 初31

15 ○ 鳥追ひのしかられて行店おろし 五8拾初12

(鳥追いの叱られて行く店御し)

店卸しⅡ商人が年度決算期に店棚の商品を取りおろして員数を調べ損得の計算をすること。(江)

商家では、毎年正月早々に店卸しを行って、昨年中の決算をした。その店卸しの最中に門付けにやって来た鳥追いが「この忙しいときに…」と叱られている。店卸しと鳥追いを組み合わせ、正月風景を描写したところが手柄。

正月の気を直す店おろし 露丸明二信2

16 ○ 能^イ後家が出来^ルと咄^スいしや仲間 五8

(よい後家が出来ると話す医者仲間)

医者仲間が「あそこの家で美人の後家が出来るぞ」と話している。医者たちは商売柄亭主の病状をよく知っているのである。川柳では美人の女房を持った亭主は節制が出来ないので、治る病氣も治らないことになっている。いゝ後家が出来ましたぞと医者同士 八〇39

17 旅へ立^ッゑハくわほうな塩をふ^ミ

(旅へ立つ嫁は果報な塩を踏み)

塩を踏むⅡ世間に出て苦勞する。他人の間でつらいめにあう。(日)

果報Ⅱ幸福なさま。幸運。しあわせ。(日)

嫁が旅行に出発する。旅先で苦勞もあるだろうが、家に閉じこもって姑にいびられているよりは余程幸せであるというような意であろう。

席上では、「塩」にこだわって江の島行きかとの意見あり。

首尾のよき嫁江の嶋へ遊山旅 五〇22

18 とぶ時はこふといゝ毛やきをし

(飛ぶときはこうと言いたい毛やきをし)

毛焼きⅡ鳥の毛をむしったあと、残ってついているこまかい毛を火で焼いて取ること。(日)

鳥を料理しようと羽根をむしり、残った毛を毛焼きするときに手羽を広げて「飛ぶときはこんな風にして飛ぶんだよ」などと話している様子。

羽をむしり毛やきの時ハ鳥部山 宝七1025

19 ○ まくら絵ハそへてもしちや直にふます 五8

(枕絵は添えても質屋値に踏まず)

踏むⅡ値段をつける。評価する。鑑定する。(日)
鎧櫃の中に枕絵を入れておく習慣があったことを踏まえて、鎧に枕絵を添えて質屋に持っていたが、質屋はいい値段を付けなかったという意。

礎講は、

①質屋は枕絵などまったく評価せず、鎧の価値しか認めない。

②枕絵まで付けたのに、やはり鎧はいい値段を付けてはくれない。

の両方に解することが出来るので「両説あり」かとしたが、席上では①ということに。

まくら絵を出してしちやへしよつて行 一二7

20 りやうり人首でも行^ッとふいて居^ル 五8

(料理人首でも行くと拭いている)

料理人が庖丁を研ぎ上げ、それを拭きながら「これはよく切れそうだ。首でも切れるぞ」などと話している。

りやうり人こしの物よりひからかし 明元松2

21 さめはだか氣でてあんちんすつこぬけ 拾四19

(鮫肌が氣障で安珍すつこぬけ)

鮫肌Ⅱ鮫の皮のようにざらざらした人の皮膚。(目)

氣障Ⅱ氣にかかること。氣にくわぬこと。(江)

安珍清姫の句。「すつこぬけ」(あるいは「ずつこぬけ」)の意味がはっきりしないが、物語の筋から考えて、清姫が安珍に迫った時、安珍は清姫が鮫肌なのが氣にか

かって逃げ出したという意であろう。「鮫肌」はその後清姫が蛇体になることを踏まえての表現。

安珍ハすでに蛇淫をおかす処 四五10

22 ▲ 御せまかろなと袴でおりを上^ッ 拾九4

(御狭かろなどと袴で折りを上げ)

『拾遺』で「戲場の部」に採られていることから見て芝居の句。芝居小屋で、羽織袴の正装をした人が栈敷にいる招待客に対し「お狭いことでございましょう」などとお追従を言いながら折り詰めを差し上げている光景であろう。政商がお役人を接待しているような場面を設定すればいいと思われる。

きやうげんを見ずにはかまではむく也 一二16

23 ○ かんざしを耳へかりたでどくつかれ

(簪を耳へ借りたで毒突かれ)

毒突くⅡはげしく悪口を言う。(日)

礎講は、男が娘から借りた簪で耳掃除をしたので、娘が汚がつてひどく怒っている光景かと思われるが、あるいは、娘から簪を借りて耳掃除などしている男を、仲間の悪友どもが冷やかし半分に憎まれ口を叩いている光景と解釈できないかとした。

席上でも意見が分かれ、結局両説有りということに。
じる耳て無^シとかんさしかりるなり 明七満1

24 ▲ おや方かねてから首を入しかへる

(親方が寝てから首を入れ替える)

たとえば、親方の所へ住み込みで修業している職人などが、親方が寝てしまったのを見届けた後、枕などで寝ているように細工した上で遊びに抜け出すという句。

にせ首にかぼちやをしたと土手ていゝ 明六桜3

25 ▲ わりたぶハしん狂言のまゝて出^ル

(割り鬘は新狂言の幕で出る)

「わりたぶ」は「割り鬘(たぼ・つと)」のこと。また、『角川古語大辞典』では「椎茸鬘を割ぶ」ともいう」とされているので、結局「わりたぶ」は「椎茸鬘」のことのようである。椎茸鬘は御殿女中が結う髪型で、ここでは御殿女中その人を指す。

句意は、「まゝて」を「幕で」と読んで、芝居見物に來た御殿女中が、旧作の芝居の内は茶屋などでくつろいでいるが、新作の狂言の幕になったら棧敷に出てくるという意かと思われる。

芝居から又裏茶屋へ片はづし 八二27

注文に出かけるといふ図。

三ッ蒲団牽頭らしいが壺人付 傍二14

29 ▲ 茶の礼にさんげくを三度いゝ

(茶の礼にさんげさんげを三度言い)

大山の句。大山参詣途上の人々が、茶屋か沿道の家で茶を振る舞われたときに、御礼の言葉として「さんげさんげ」と三度言ったという意だろう。「さんげさんげ」を唱えながら行くので、つい口を突いて出るのである。

茶をのむとさんげくをたんといふ 安八松4

30 × 岡さきハくらやミてひくうたでなし

(岡崎は暗闇で弾く唄でなし)

岡崎Ⅱ岡崎女郎衆の略。江戸初期、一節切、または三味線に合わせて歌われ、流行した小歌。三味線の稽古曲として用いられた。(目)

岡崎女郎衆は三味線の初心者が練習する曲だから、この曲の弾き手はまだ手元を一生懸命見ていないと弾けない程度の腕前。そのことを「暗闇で弾く歌でなし」と表現したもの。腕が上がってくると例句の如くなる。

おかさをくらやみでひく御しやうたつ 一一5

26 ○ しんこんにてつしてむこハ出^ル氣なり 五8

(心魂に徹して聲は出る氣なり) 拾初39拾一〇15

心魂に徹するⅡ堅く心に決める。(目)

入り婿が、数々の屈辱に耐えて我慢をしてきたが、ついに我慢できなくなつて家を出る覚悟を決めた、ということ。「心魂に徹して」は文句取りかとも思われるが発見できず。単に難しい言葉を使っただけか。

しんこんにてつしてゑハ十三里 五一31

27 ▲ すき分ハあだやおるかにあそばぬ氣 五8

(素戔分はあだやおるかに遊ばぬ氣) 拾六11

あだやおるかⅡ軽々しく。いいかげん。(目)

素一分は、一分だけしか持っていない遊客のこと。なけなしの一分を有効に使おうと、必至の形相で吉原中を品定めして廻っている。「馬鹿な遊客だね」というのが、句の作者の気分である。

す壹分を持てそかいやこかいや 二四7

28 ▲ こふくやへある日たいこを同道し

(呉服屋へある日牽頭を同道し)

三蒲団の句。吉原の遊女に三蒲団を買つてやる約束をしたお大尽が、ある日太鼓持ちをお供に連れて越後屋へ

31 × 四郎兵衛が一ッはい喰た女房なり

(四郎兵衛が一杯食った女房なり)

四郎兵衛Ⅱ吉原大門口の会所に詰め、専ら女郎の脱走を監視する番人の通称。(江)

吉原の遊女が、うまく男に変装して四郎兵衛の目をごまかして脱廓し、好きな男の女房に納まったという句。

四良兵衛が男とおもふ運のよさ 傍一19

32 ▲ 上下でしかられて居^ル松右衛門

(上下で叱られて居る松右衛門)

松右衛門Ⅱ(享保八年、吉原の遊女音羽との心中に失敗した、神田白壁町の丹波屋八郎兵衛が車善七に引き渡され、松右衛門と改名して江戸南方の非人頭になったことによる)江戸の新橋から南品川にかけての一带を持ち場とした非人頭の通称。またその配下の非人たち。(目)
礎講は、慶弔のある家へ上下を着て祝儀をねだりに行った松右衛門の配下の非人の句かと思つたが、石井良助『江戸町方の制度』に「吉凶慶弔のことあるとき非人等が人の家に於て勧進するには必ず三人相伴ふを常とす。この時は木綿ながらも羽織を襲ふなり」とあり、上下を着用することはなかったようなので、主題句の場合はず「上下で叱られている」のか分からず不明句とした。

席上でも、諸議論あったものの結局不明ということに。

33 ▲ 首筋をとらへて札をひつたり

(首筋を捕らえて札を引つたり)

礎講は、頼朝が放った放生の鶴を捕まえて首筋を押さえ、足に付いている黄金の札を引つたくった様子とする。と辻棲は合うものの、類句が全くないので疑問としたが、席上では、やはり頼朝の鶴の句だろうということに。

34 ▲ てゝおやか来れハ内裏も直か出来る

(父親ておやが来れば内裏も値が出来る)

値が出来る。値段の話し合いがつく。(江) 雛市の句。雛祭りに飾る内裏雛を買うのに、雛市へ母親が来たのではなかなか値段の折り合いが付かないが、父親が来れば決断が早いので商談がまとまるというのである。

大どらだくと雛をかつぎ込_ミ 一三三₂

35 ▲ 打ち出_ヌと裏へ廻_ルるハきつい好き_キ

(打ち出すと裏へ廻るはきつい好き)

「打ち出す」は芝居が終演になること。芝居が終わると小屋の裏側にある楽屋口に戻って役者が出て来るのを待

とどついた目でいんきよさん御さらばへ 天元宮 2

38 すけつねハ今朝の御礼かいとま乞 五 8

(祐経は今朝の御礼が暇乞い)

御礼。江戸時代、在府の大名が、毎月・一日、十五日、二十八日の月次および大礼の日に登城して将軍に拝謁すること。(日)

曾我兄弟が富士の巻狩りで工藤祐経を討ったのは、建久四年五月二十八日夜のことだから、祐経はその朝頼朝に月次の御礼に伺候したのが暇乞いになってしまったということ。鎌倉時代の事件を江戸時代の慣例に引き直したおかしみがミソ。

祐経ハかり場へ立ッにかけか無_イ 宝一三梅 2

っているのは、熱狂的な役者ファンである。

今出ると芝居のうらにばかなつら 安四松 4

36 ○ 留主の月入_レて十月のやかましき

(留守の月入_レて十月のやかましき)

ここで「十月」は、いわゆる「十月十日」の妊娠期間のこと。女房がお産をしたが、逆算をしてみると亭主が家を留守にしていた月が十月目になる。即ち留守の時に妊娠したことになるというので騒ぎになったという意。

万才ハ十月産_ムとがてんせす 器の水 34

37 ▲ よし町ハ客か御さらばいふところ

(芳町は客が御さらば言うところ)

御さらば。別れのあいさつをていねいにいうことば。(日)

おさらばえ。おさらばよりやさしい気持をあらわす。

江戸の遊里語。(日)

吉原では遊女が客に対して「おさらば」と言うが、芳町では逆にお客の方が「おさらば」と言うとの意。「おさらば」は多く女性が使う言葉のようであるので、御殿女中や後家などの女性客を詠んだ句であろう。例句は吉原の新造。

